

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2754号 2015.124 発行

ダウン症の僕、不幸じゃない タレント・あべけん太さん 朝日新聞 2015年12月1日  
仕事帰り、父親の会社に寄ったあべけん太さん（左）＝東京都港区



茨城県の教育委員が障害児の出産を「茨城県では減らしていける方向になったらいい」と発言し、辞職した。2013年にはダウン症などの胎児の染色体異常を調べる新型出生前診断が始まり、羊水検査などで異常が確定した人の中には中絶を選んだ人も多い。あるダウン症の青年は問いかける。「なぜ？僕は不幸じゃない」

（読む）「ダウン症って不幸ですか？」 姫路まさのり著 朝日新聞 2015年12月1日  
「ダウン症って不幸ですか？」

ダウン症の子を授かると、どんな毎日が待っているのか。本書は、子どもの小さな成長を喜び、進路に迷い、社会に出て働く様子を見守る五つの家庭の日常をつづった。ダウン症の人やその家族を「かわいそう」と思い込んでいないだろうか。社会に浸透した誤解や固定観念に気づかされる一冊。



3日から障害者週間 栃木県が9日に初のフォーラム 下野新聞 2015年12月3日  
ナイチュウピンバッジを県に寄贈し、福田知事（右）から感謝状を受け取った足銀の松下頭取＝2日午後、県庁  
障害者週間（3～9日）に合わせ、内閣府と県は9日午後1時から、県総合文化センターで来年4月施行の障害者差別解消法の理解促進に向けたフォーラムを初めて開催する。2日には足利銀行が県障害福祉課のキャラクター「ナイチュウ」のピンバッジ3千個（50万円相当）を県に寄贈したほか、4日と9日には県庁で障害者施設で作られた商品の展示販売が行われる。



「障害を理由とする差別の解消に向けた地域フォーラム」は、障害者差別解消支援地域協議会の在り方検討会構成員の南雲明彦（なぐもあきひこ）さんが障害者差別解消法と基本方針について基調講演するほか、内閣府の担当者や県内の障害者団体代表者らをパネリストに招いてパネルディスカッションを行う。参加無料。

足銀が県に寄贈したピンバッジは県地域福祉基金に500円以上寄付した人に配布され、同基金への寄付増を支援する。

「とちぎナイスハートバザールinけんちょう」は4日と9日の午前10時～午後2時まで、県庁1階ロビーで実施する。延べ40事業所が出店し、手作りのパンやお菓子、雑貨などを展示販売する。合わせて同基金の募金活動やピンバッジの配布も行う。(問)県障害福祉課028・623・3490。

## チャレンジ！パラスポーツ最前線「汗」も「笑顔」も…岐路に立つ全国障害者スポーツ大会

日本経済新聞 2015年12月3日

10月24日から3日間、和歌山県を舞台に繰り広げられたのが、障害者スポーツの祭典「全国障害者スポーツ大会」(全スポ)だ。健常者の国民体育大会にあたるもの、といったらわかりやすいだろう。全国から集まった障害者がスポーツを通じて競い合い、交流する。開催地に一度に多くの障害者が集まることで、地域の人々の障害者に対する理解を深めることも狙っている。

### 大型ビジョンには手話通訳と字幕が同時に映されていた ■共生社会へのヒント詰まった開会式

ルーツは1965年に始まった「全国身体障害者スポーツ大会」。これが、92年にスタートした「全国知的障害者スポーツ大会」と2001年に統合し、全スポとして国体開催県で、国体開催後に開かれることになった。全スポとなってからは15回目だが、前身から数えて今年で50年の節目だった。20年東京パラリンピックを前に障害者スポーツへの関心を盛り上げようとするなら、50周年記念で何か特別なイベントやPRがあってもよかったように思うが、何もなかった。主催者の日本障がい者スポーツ協会(日障協)にそうした発想がなかったのは残念だが、大会自体は心配された雨もほとんど降らず、盛り上がった。

開会式には、共生社会に向けてのちょっとしたヒントが詰まっていた。会場の紀三井寺公園陸上競技場の大型ビジョンには、選手たちの入場行進の映像と同時に、進行役がしゃべる内容を手話通訳する女性の映像と、逐次文章にした字幕が映し出されていた。選手だけでなく、観客の中にも聴覚障害者がいるかもしれないと考える配慮だ。そして国旗掲揚・国歌斉唱の際には、通常の起立を促すアナウンスの後、こう付け加えた。「ご起立に支障のある方は着席のまま、姿勢をお正してください」

これも身体障害者がスタンドにいるかもしれないことへの思いやりだ。障害者スポーツの大会だからといって、観客にも障害者が特段多いというわけではなかった。そう考えると、同じような配慮が様々なスポーツ大会で広がるのが今後、望まれる。手話通訳や同時字幕は、人手も技術も必要だから簡単にはいかないかもしれないが、国歌斉唱の時にひと言添えるだけなら、どこでもできる。

これからヤマ場を迎える、サッカー日本代表のワールドカップ(W杯)予選の試合前の国歌斉唱で、こんなアナウンスがあったら、間違いなく多くの人が、「いいね！」ボタンを押したい気持ちになるだろう。健常者と障害者の共生とは何か、という問いへの回答は、こんなところから人々の心にすんなり入っていくのではないだろうか。



電動車いすを操作して障害物の間を走り抜ける速さを競う陸上のスラローム

### ■強い選手だから出られるわけでなく



今回の全スポで実施されたのは、オープン競技を含めて15競技。水泳、陸上、車いすバスケットボールなどパラリンピックでもおなじみのものから、グランドソフトボールやサウンドテーブルテニス（STT）など独自のスポーツもある。電動車いすを使う重度の障害者も、その車いす操作を競うスラロームという種目が陸上にあり、障害の度合いにかかわらず、スポーツを楽しめる工夫がなされている。

STTは、視覚障害の選手がプレーする卓球だ。戦前に日本の盲学校で考案され、広まった。卓球と同じ台を使うが、鉛の球が入って音がするピンポン球を転がして得点を競う。球はネットの上を越すのではなく、ネットの下を通す。初めて試合を見たが、観客も含めて静けさを保たないといけない緊迫した空気の中、フルセットにもつれこむ熱戦となり、面白かった。

この試合に勝利した北海道代表の水上康章さん（62）は競技歴11年。全スポ参加は7年前が初めてで、その時は優勝。今回はそれ以来の出場で、「年をとってきたので、もっと大会に出たいんだけど……」と言いよんだ。実は、全スポは必ずしも強い選手が出られる大会ではないのだ。

前身の身障者スポーツ大会は、個人競技は一生に1度しか参加できない規定があった。スポーツを通じて、障害者の社会参画を促すことが大会の目的で、より多くの障害者に出場機会を与えるためだ。全スポに衣替えしてその規定はなくなったが、参加資格に関しては各地方自治体に運用が任されており、京都府のように、今でも個人競技はすべて初出場者に限定しているところもある。北海道は、前回出場から5年以上経過しないと再出場できないルールがあるため、ディフェンディングチャンピオンであるはずの水上さんの2回目が7年ぶりとなった。



全スポ独自の競技、サウンドテーブルテニス。視覚障害者がプレーする

#### ■在り方委員会で大会見直し論議開始

これ以外にも、全スポが国体と違う点がある。個別の競技ではきちんと順位を決めるのだが、国体のように得点を累積して自治体に順位をつけることはしない。また、参加自治体も国体は都道府県単位だが、全スポでは都道府県と政令指定都市となっている。

かつて全スポを所管していた厚生労働省によると、障害者スポーツの拠点となる福祉施設や特別支援学校は大都市にあることが多く、そうした拠点でチームを作って参加を促すには、政令指定都市単位での出場を認めた方がいい、という判断があったという。ゆえに、今でも例えば仙台市と宮城県がそれぞれ別の代表団を組んで参加している。かように全スポは国体と似て非なるもの、といえる。

そんな全スポだが、日障協は今年7月、鳥原光憲会長の私的機関として「全国障害者スポーツ大会在り方委員会」を立ち上げ、見直し論議を始めた。多くの関係者が「全スポは岐路に立っている」（河合純一・日本身体障がい者水泳連盟会長）と感じているためだ。東京パラリンピック開催が決まり、全スポの所管も昨年、厚労省から文部科学省に移って、パラスポーツでも競技性を高める方向に流れていることが背景にある。

陸上、水泳などパラリンピックと同じ競技でも、全スポでは実施種目が異なり、また障害の度合いに応じたクラス分けも、パラリンピックとは違う。パラスポーツ団体は小所帯で全国津々浦々に地方組織を置くところはないため、全スポは新しい選手発掘の場として貴重な機会となっている。現状ではいい記録を出した選手をスカウトしても、詳しく調べてみたらパラリンピック出場資格を満たさない障害だった、ということが起こりうる。



#### 仙台市と愛知県が戦った車いすバスケットボールの試合

また、都道府県と政令指定都市が別々に選手を送る点も、車いすバスケットボールのように競技人口が増え、各地にクラブチームが創設されると、同じチームの選手が県と市に分かれることになりかねない。全スポはせつかく全国から強豪が集

まる貴重な試合の場合なのに、いつも練習をしている仲間で戦えない。

#### ■「競技性」と「楽しむ」をバランスよく

在り方委員会は毎月 15 日に 2 回目の会合を開き、こうした問題点の洗い出しをして、議論を進める方針だ。日本のパラスポーツの底上げをするために何ができるか、がその中心になるだろう。

ただ、「競技性」を強調するあまり、今の全スポの良さが失われてはならないと思う。大会を初めて取材して印象的だったのは、国体と違い、参加者に笑顔が目立つことだ。選手宣誓をした谷口ゆかりさん（37）も笑顔が印象的な一人。脳性まひで足が不自由。これまでスポーツに真剣に取り組んだことはなく、「あえて避けて文化系に走っていた」が、7 年ほど前にアーチェリーに出会い、「自分でも一生懸命やれると真剣にやり出した」という。

スポーツの本源的な目的である「楽しむ」という姿勢を、全スポではより多く感じることができる。もちろん、相手に勝とうと流す汗も大切。競うことから来る「汗」と、楽しむことから来る「笑顔」の両方をバランスよく包摂した大会が理想なのだろう。（撰待卓）

#### 神戸ルミナリエゆっくり鑑賞 ハートフルデー

神戸新聞 2015 年 12 月 2 日

阪神・淡路大震災の犠牲者を悼む「神戸ルミナリエ」の開幕を前に、身体障害者らを招待する「ハートフルデー」が 2 日、神戸・三宮の東遊園地であった。車いす利用者ら約 1 万 5 千人が一足先に光の芸術を楽しんだ。

障害のある人に混雑を避けてゆっくり鑑賞してもらおうと、1999 年から毎年実施。光の壁が一带を囲む「スパッリエラ」が点灯し、発光ダイオード（LED）が描く鮮やかな色に拍手と歓声が広がった。



LED の鮮やかなイルミネーションに見入る来場者ら＝2 日夜、神戸市中央区加納町 6、東遊園地（撮影・風斗雅博）

車いすで訪れた吉田睦美さん（62）＝神戸市灘区＝は震災当時、自宅マンションが全壊。「この光を見ると壊れた街の悲惨さも、ボランティアの優しさも、全て思い出します。今年は緑色が特にきれい」と目を潤ませた。

会場では、東日本大震災発生時に東北楽天ゴールデンイーグルスに所属した米大リーグ・岩隈久志投手らのフリートークもあった。

手らのフリートークもあった。

会期は 4～13 日。4 日午後 5 時 45 分から点灯式がある。神戸市総合コールセンター TEL078・333・3330（金 慶順）

#### 児童虐待 届かぬ通報 児相転送前に切るケース 8 割

東京新聞 2015 年 12 月 3 日

児童虐待の情報が、児童相談所（児相）に届かない。国が虐待情報の通報などのため、七月から導入した全国共通ダイヤル「189」について、児相に転送される前のガイダンス段階で、利用者が切るケースが首都圏の一部自治体で約 8 割に上がることが、本紙の取材で分かった。通報に料金がかかり、児相につながるまでに時間を要する仕組みに不満が出ている。情報提供をした人が電話の途中で切ってしまうケースもあり、関係者からは改善を求める声が出ている。（北川成史）

本紙は首都圏で児相を運営する一都六県と政令市五市、中核市の神奈川県横須賀市から、七～十月の 189 の状況を質問。このうち茨城、群馬、千葉、神奈川の四県と千葉、横浜、横須賀の三市から、189 が児相までつながった件数と途中で切れた件数について回答があった。ほかの自治体は詳しい統計を取っていないかった。

回答によると、四県三市の管轄地域内であった 189 の計六千八十六件のうち、ガイダ

ンス途中で切れたのは、81%に当たる四千九百二件。最も低い横須賀市でも62%。その他は70%に達し、最も高い茨城県では87%に上った。

利用者からは「児相につながるまでのガイダンスが長い」（神奈川県、横浜市など）という声が寄せられている。

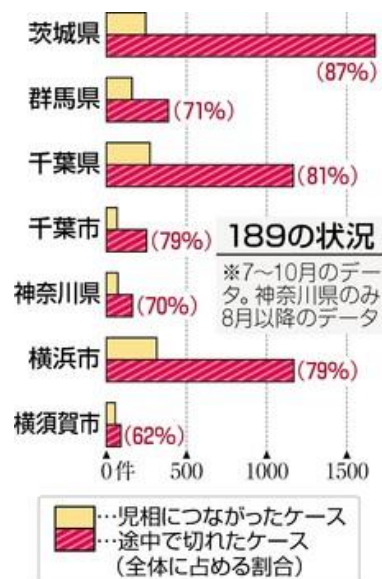
固定電話の場合、利用者の市内局番と地域の児相の管轄地域が一致すれば、189を押すだけで、その児相に直接つながる。ただ、料金を説明するガイダンスなどもあり、順調でも一分近くかかる。さらに、携帯電話の場合、管轄の児相を特定するため、利用者がガイダンスに従って、居住地の郵便番号や都道府県の番号を入力しなければならず、長引きやすい。

料金は、電話した時間帯や架電先との距離にもよるが、三分あたり固定電話なら八・五円、携帯電話なら九十円かかる。「料金が負担になる」（神奈川県）という声も寄せられており、「児相との電話の途中で、『お金がない』と切れ、被害児童が特定できず困ったケースもある」（千葉県）という。

NPO法人児童虐待防止全国ネットワークの高祖常子理事は『虐待かも』と思った人が『面倒くさい』と途中で切るとしたら、導入の目的を果たしていない。善意の通報が本人負担なのはどうかと思う」と指摘し、簡潔なガイダンスなど改善を求めている。

厚生労働省の担当者は「導入されたばかりなので、試しにかけているケースもあるだろう。どういう理由で切るのか、実態を把握し、必要があれば改善を検討したい」と話している。

<全国共通ダイヤル「189」> 児童虐待かもしれないと思ったときなどに、児童相談所に通報や相談できるダイヤル。従来は10桁の番号だったが、深刻な児童虐待が後を絶たない中、「いちはやく」の意味を込め、覚えやすい3桁にした。虐待を見たとか、聞いたという通報だけでなく、「育児が辛い」「育児に悩んでいる人がいる」といった相談も受け付ける。



## 発達障害の僕 「居場所は柔道」 人権作文県大会 豊橋・青陵中の奥村君 最優秀賞

中日新聞 2015年12月1日

第35回全国中学生人権作文コンテスト県大会で、最優秀賞に選ばれた豊橋市青陵中学校2年、奥村由輝（ゆうき）君（13）の作文を一部抜粋ながら紹介します。テーマは「発達障害って知っていますか」。つらかった体験を率直につづりながら、奥村君は前を向きます。周りの大人や同級生たちの支え、とりわけ母親の一言が、人にとってとても大切なことを教えてくれます。（相沢紀衣）

「発達障害って知っていますか」 青陵中2年 奥村由輝＝一部抜粋

奥村由輝（ゆうき）君



みなさんは「発達障害」を知っていますか？ 身体的障害はなく、生まれた時からの脳の障害と言われています。発達障害のある人は、コミュニケーションや対人関係をつくるのが苦手です。複数の障害が重なって現れることもあるし、障害の程度や年齢、生活環境などによっても症状は違ってくると言います。もっとたくさんの人に知ってもらいたいと思ってこの作文を書きました。

僕は「アスペルガー症候群」と「注意欠陥多動性障害」があります。小学校に入学するまでは、ただ「元気いっぱいやんちゃな子」だと思っていたそうです。それでも保育園

では友達をたいたたり、トラブルは数多くあったみたいです。

小学校に入学して、とつぜん時間の自由がなくなり、何が起こったのか分かりませんでした。運動会の練習では並んで待つこともあり、列からはなれてしまうことが多くありました。すると先生に怒られて、列に戻されました。

怖くなった僕は何度も学校から飛び出して家に帰りました。先生はすごい勢いで走っておいかけてくるんです。

お母さんは何度も何度も学校に呼び出されました。いつも泣いていました。「もう学校に行かなくていいから、2人でずっと家に居ようか」と言われました。でも、僕は学校が大好きでした。登校中に問題を起こすと、お父さんが学校に送ってくれました。

ある日、お父さんとお母さんが校長先生に呼ばれて学校へ行きました。「半年様子を見て、いいかげん落ち着いてきていい頃だけど、何があったんだ。一度検査をしてみたらどうですか」と言われました。

すぐに市の教育委員会の相談所に予約を取りました。メンタルクリニックも紹介してもらいました。

診断名「アスペルガー症候群」。後に、注意欠陥多動性障害もあると知りました。

小学校1年の夏休み明けに、支援級に編入しました。バスに乗って買い物に行ったり、農園の世話をしたりと、生活の授業がたくさんありました。交流で通常級に行っても、友達が変わらず遊んでくれました。

これで何もかも安心か?! と思いましたが、でも・・・違いました。

下校中に上級生にカサでなぐられたり、廊下で見たこともない上級生の女子に「5、6組の奥村じゃん? バーカ」と言われたり。支援級にいただけでいじめの対象になるんです。ずっと言われ続けました。

でも、そんな人ばかりではありません。僕が何度問題を起こしても、助けて遊んでくれる友達はいました。お父さんやお母さん、学校の先生、市の教育委員会の「にじのこ相談所」の先生たちは、いつも話を聞いて助けてくれました。

みんなのサポートがあって、小学校5年生から通常級に戻りました。その後もトラブルはありましたが、なんとか中学2年の今の僕がいます。成績は決して良くはありません。

中学1年の冬に僕は「柔道」に出会いました。初めて人に認められて、期待されることを覚えました。柔道の世界には僕の居場所があります。アスペルガーと知っていても、道場の先生は必死に理解してくれます。夏休みには県大会にも出ました。

発達障害のあるみんな、つらいこともあるけれど、それだけじゃないよ。いいことは必ず来るからがんばって! お父さん、お母さんもあきらめないで。僕のお母さんは「生んで良かった」といつも言っています。発達障害を知らない人は、少し調べてみてください。少し理解してみてください。みんな同じ人間なんですから。

他の人と同じように話して

発達障害について親から聞いたのは、小学4年生のときです。保育園の先生に「ふつうの子と違う」と言われたことがありますが、あまり意識していませんでした。

1年前、父の勧めで体格を生かせる柔道を始めました。道場の先生は、初めて発達障害の子を受け入れたそうです。一生懸命、障害について勉強してくれています。以前は、怒られると暴力をふるうことがありました。柔道を始めてからは、相手のことを考え、たたくことが無くなりました。両親や先生、友達のおかげです。

受賞して、多くの人が自分を知ると思うと緊張します。発達障害を知ってもらい、他の人と同じように話してくれればと思います。

**障害者の手作り販売 府庁マルシェ、多彩な品ずらり** 大阪日日新聞 2015年12月4日

大阪府内の障害者が手作りのパンや雑貨などを販売する「府庁マルシェ」が3日、大阪市中央区の府公館で始まった。アクセサリや衣類などさまざまな製品が並べられ、来場

者が買い物を楽しんでいた。この日は8事業所が出店。丹精を込めた製品を事業所の通所者やスタッフがアピールし、買い物客が熱心に品定めをしていた。手提げかばんを購入した松井一郎知事は、機織りを実演していた事業所の女性に「大事に使います」と声を掛けた。

「こさえたんサポーター」に登録する松井知事＝3日午前、大阪府公館

会場には府内の障害福祉施設の製品の購入や販売活動をPRするボランティア「こさえたんサポーター」の受付窓口も設けられ、松井知事が登録。「こさえたん」は福祉施設の製品をPRするための愛称で、「作る」を意味する大阪弁の「こさえる」が元になっている。

府主催の府庁マルシェは、製品の普及啓発と障害者の賃金アップが目的。土、日曜日を除き、9日まで開かれる。午前11時～午後2時。期間中は計36事業所が出店する。



### 「認知症カフェ」全国に600カ所、関心あれば誰でも 悩みや不安を相談、専門家アドバイス

日本経済新聞 2015年12月3日

認知症のお年寄りや家族などが集う「認知症カフェ」が全国で広がっている。お茶を飲みながら困りごとなどを語り合い、専門家のアドバイスも受けられる。運営側は認知症について正しく理解してもらおうと、当事者以外の人にも「来店」を呼びかける。カフェはどのような仕組みなのか。各地の施設を訪ねた。

「母はここに来ると笑顔が絶えない。私もひととき介護を忘れられる」。11月下旬、認知症カフェ「Dカフェ・リハビリ工房」（東京・目黒）を訪れていた50歳代の女性は話した。

80歳代後半の母は車椅子に頼る生活で要介護度は最も重い5。認知症でコミュニケーションはとれない。昨年、女性は介護で疲弊していたときにカフェのことを知り、母と一緒に通い始めた。Dは認知症を指す英語「Dementia」の頭文字。女性の何気ない話にも男性スタッフは共感し、女性が何でも話せるようにする。一方で母親は作業療法士の介助で木づちを使ってコースター作りに夢中だ。リハビリ工房という名前は、ものづくり体験ができるという意味を込める。症状の進行を抑えるとされるプログラムだ。

#### ■一人で悩まずに

同カフェを運営するNPO法人Dカフェnet代表理事の竹内弘道さん（71）は「一人で悩まず気軽に立ち

#### 認知症カフェは全国で広がっている

##### ●どんなところ？

認知症について、家で一人悩まず、気軽に立ち寄り話し合える場所。発症の有無によらず、誰でも参加できる



##### ●参加費用は？

1人100～300円程度。歓談中心だが、介護職や看護師などスタッフによるミニ体操、健康相談などのプログラムがあることも

##### ●どこにある？

市区町村の介護担当者や地域包括支援センターに問い合わせれば、最寄りにあるかどうか教えてくれる



民家を改装して親しみやすさをアピールする「オレンジサロン石蔵」（宇都宮市）

（注）Dカフェnetの竹内弘道さんらの話を基に作成

寄って話し合ってもらふ場所で、医師など医療関係者もふらっと訪れるのが認知症カフェ」と話す。認知症とひとくちに言っても、アルツハイマー型、レビー小体型など様々な種類がある。カフェでの医師とのやりとりがきっかけで病気の型が分かり、有効な治療に結びついた例もある。

竹内さんは自宅や区の施設を利用し、目黒区内にカフェを8カ所営む。営業は毎日ではなく、週1回から月1回程度で、1回あたり2時間ほど。「一人300円払ってもらえれば、だれでも利用可能」という。地域に大きく窓を開いているのが特徴だ。

認知症関連の集まりには、家族会や介護者の会などが以前からあった。カフェは集まる人を限定しないのが特徴で、認知症の人自身にも「来店」を促す。国も認知症対策として、自治体に設置を促しており、全国に多めに見積もって600カ所ほどあるといわれる。オランダと英国の取り組みがモデルとなっており、運営主体も様々だ。

### ■働く場の試みも

認知症の人を特別視せず、希望すればボランティアとしてスタッフの側に回ってもらふ試みもある。公益社団法人認知症の人と家族の会栃木県支部(宇都宮市)が、同市内で運営するカフェ「オレンジサロン石蔵」はその一つ。ここでは65歳未満で発症した若年性認知症の人たちが働く。

訪れた11月半ば、57歳の女性がランチの料理を皿に盛り付けていた。「体が動く限りは、何でもしたい」と話す。カフェの責任者の金沢林子さんは、「他の若年性の人にも配膳や接客をする。だれかに必要とされていると感じてもらい、生きがい創出につなげる」と話す。若年性の人たちが働くありのままの姿をみんなに見てもらい、病気への理解を深めるのが狙いだ。カフェは広がりつつあるとはいえ、歴史は浅く一般にはまだあまり知られていない。「オレンジカフェ えんむすび」(東京・江東)は全国でも珍しい常設のカフェで、情報発信にも熱心だ。入り口に高齢者が懐かしいと感じるようなお地藏さんを置いたり、足湯コーナーを設けたりして、関心を引こうとつとめる。近隣地区で新聞の折り込み広告を出したこともある。

介護会社のすこやか(同)が運営し、介護福祉士も立ち寄る。地域には独居のお年寄りが多い。認知症の相談だけでなく「介護全般のよろず相談所を目指している」と話す。家族の介護に悩む人、認知症に漠然と不安を感じている人、どんなことでも認知症に関心のある人ならカフェ利用が可能。最寄りの自治体の介護担当者や地域包括支援センターに問い合わせれば、どんなカフェがどこにあるかを知ることができる。

介護会社のすこやか(同)が運営し、介護福祉士も立ち寄る。地域には独居のお年寄りが多い。認知症の相談だけでなく「介護全般のよろず相談所を目指している」と話す。

家族の介護に悩む人、認知症に漠然と不安を感じている人、どんなことでも認知症に関心のある人ならカフェ利用が可能。最寄りの自治体の介護担当者や地域包括支援センターに問い合わせれば、どんなカフェがどこにあるかを知ることができる。

### ■正しい理解へ セミナー続々

認知症への理解を促すセミナーも増えている。介護大手のベネッセスタイルケア(東京・新宿)は、認知症など高齢者が気をつけた方がいい病気の早期予防を目的に、全国で定期的に無料の「地域医療セミナー」を開く。医師を講師に招き、正しい理解を広める。

11月下旬は都内で「認知症の正しい理解と予防」を開催。慶大病院の三村将副病院長が、会場に集まった90人の受講者に外に出て歩くことを勧め、「前向きに生きよう」と呼びかけた。介護関連各社も同様のセミナーを手がける。

厚生労働省研究班は、認知症高齢者は2012年時点で462万人と推計。発症に影響する糖尿病がこのまま増加すれば、25年には730万人に増えると予測する。高齢者の5人に1人にあたる。ベネッセスタイルケアは「認知症は人ごとではない。セミナーで予防の大切さを訴えたい」と話す。(保田井建)

